

国士館を支えた人々

安川敬一郎と安川・松本家の人々

松岡 李奈



1912年 安川敬一郎
（『撫松余韻』松本健次郎発行、
1935年）

はじめに

二〇一五（平成二七）年七月五日、幕末から明治にか

けて日本の近代化に貢献した産業遺産群として、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界文化遺産に正式登録された。この遺産群は八県一市からなる二三資産から構成され、世界遺産の登録基準における「ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展における人類の価値の重要な交流を示していること」、「人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること」の二点を満たすと評価された。一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、日本は世界にも類を見ないほどの急速なスピードで近代化・工業化・産業化を果たしたことは周知のとおりだが、この遺産群は、造船、製鉄・製鋼、石炭と重工業分野における産業国家形成と発展の道のりを証言するものである。

この遺産群には、高島炭鉱や三池炭鉱をはじめとする炭鉱遺産も多く登録されている。石炭は日本におけるほぼ唯一のエネルギー資源であり、明治から戦後に至るまで日本の産業発展を支え続けた。また、石炭産業の繁栄により生じた利益は、教育事業や福利厚生など様々な形で社会に還元された。国士館大講堂（二〇一七年一〇月二七日、国登録有形文化財〔建造物〕に登録）をはじめ、世田谷移転に伴う国士館校舎建設費用も炭鉱資本による支援を受けたひとつである。国士館の創立者のひとりである柴田徳次郎は、福岡県の出身であり、国士館の創立・運営は頭山満や野田卯太郎をはじめ、福岡県を中心とする人脈によって支えられていた。筑豊炭鉱実業家も、金銭支援や人脈形成において国士館発展を支える役割を担っていた。

本稿で紹介する安川敬一郎（以下、安川）は、息子である松本健次郎（以下、健次郎）とともに炭坑経営をはじめとする多角的経営を行い、安川・松本財閥と称される福岡筑豊の有力炭鉱実業家である。筑豊は良質な石炭を出炭する一大工業地域であり、明治維新後は三菱・三井をはじめ多くの有力財閥が進出したほか、地元鉱業家の経営による中小炭鉱も多数存在していた。その中で筑豊御三家と称されるのが、安川・松本、麻生、貝島の三

家である。彼らは地元福岡県出身であり、活動基盤が福岡県であったこと、炭鉱に限らず多角的経営を行ったことからしばしば地方財閥と評価される。国士館に対する支援は安川本人にとどまらず、息子である健次郎・安川第五郎も国士館大学維持委員会に名を連ね、多大な支援を行っている。

安川・松本家に関する先行研究は数多い。安川・松本家研究の先がけとして、「財閥史」的視点に立った森川英正『地方財閥』（日本経済新聞社、一九八五年）、合力理可夫「安川・松本家における経営多角化」（『第一経大論集』第一九卷三号、一九八九年）があげられる。森川は安川・松本家の全体像を整理し、その事業を地方財閥として位置づけた点、合力は安川・松本家の多角的経営に着目した点が評価される。

また安川・松本家に関する研究を整理分析し、関連文献をまとめたサーベイ論文として、坂本悠一「安川財閥研究の現状と文献」（『社会文化研究所紀要』三八号、一九九六年）が存在する。これらの先行研究を考えるうえで重要な点は、安川・松本家の研究には、伝記や社史といった人物・企業美化傾向の強い資料に依存せざるを得ないという資料的制限が存在していた点である。

しかし近年、『安川敬一郎日記』一〜四卷（北九州市

立自然史・歴史博物館、二〇〇七―二〇一二年）の刊行をはじめ、安川家文書の整理が進んだことで、安川・松本家に関する研究はさらに広がりをもせている。具体的

には、北九州地域経済との関係を明らかにした清水憲一「『安川敬一郎日記』と地域経済の興業化について（一）」『社会文化研究所紀要』三八号、一九九六年）、安川の労使協調思想に着目した佐藤正志「安川敬一郎の経営理念」（『九共経済論集』一七卷、一九九三年）、安川の政治的側面に着目した有馬学「企業家の政治活動における〈国家〉と〈地方〉―安川敬一郎と大正前期の政界―」、安川自身が「天恵」であったと述べている安川・松本家の事業転換期として重要な日清・日露戦期を中心に動向を整理した日比野利信「日清・日露戦間期の安川敬一郎」、安川と地域政治の関係について若松町水道布設問題を通して論じた松本洋幸「日露戦後の若松町と安川敬一郎―若松水道布設を中心に―」（以上すべて有馬学編『近代日本の企業家と政治―安川敬一郎とその時代―』吉川弘文館、二〇〇九年）、家産関係帳簿を中心に安川・松本家の組織構造や投資活動、財閥への発展の実態を明らかにした中村尚史『地方からの産業革命―日本における企業勃興の原動力―』（名古屋大学出版会、二〇一〇年）などの研究をあげることができるだろう。安川・松本家

は、典型的な地方財閥として経営史・経済史的視角による研究が盛んであったが、政治史・文化史的側面から研究が進んできたといえる。

本稿では、しばしば「国士」的企業家と評価される安川、息子であり共同経営者であった健次郎、安川第五郎の略歴を紹介した後、福岡県人脈や安川思想と教育観を中心に安川・松本家と国士館との関わりについて考察する。略歴については、回顧録・遺稿集である『撫松余韻』（松本健次郎発行、一九三五年）、『松本健次郎懐旧談』（鱒書房、一九五二年）や、『安川第五郎伝』（安川第五郎伝刊行会、一九七七年）を参照した。

一 安川・松本家の略歴

安川敬一郎

安川敬一郎は一八四九（嘉永二）年、筑前国早良郡鳥飼村（福岡県福岡市中央区鳥飼）に、福岡藩士徳永省易の四男として誕生した。父は儒学者であり、安川は幼少期より四書五経をはじめ様々な学問にふれる環境に育った。長兄織人が徳永家を継ぎ、次兄潜が松本家に、三兄徳が幾島家にそれぞれ養子に行き、安川自身は一八六四（元治元）年、一六歳で安川岡右衛門の養子となり、岡

右衛門の娘・峯と結婚して、安川家の家督を相続した。

藩校修猷館に通い、勉学に励んだ安川であったが、武芸を重視する当時の福岡藩士の風潮に反して学問に熱中し、しばしば「青表紙」や「学者」と呼ばれて誹謗を受けることもあった。一八六八（慶応四）年、若くして藩の学問所助教として勤務を開始するも、すぐに京都留学を命じられ、帰藩後執政局書記の任についた。書記として勤務した時間は短期間であったが、その間に中国・熊本・鹿児島・東京と各地に視察に赴き、見識を磨いた。一八七〇（明治三）年には再度留学を命じられ、藩費留学生として静岡藩に留学した。安川留学時、静岡藩には大久保利通・勝海舟・山岡鉄舟らが滞在しており、特に勝とは頻繁に面会する機会に恵まれた。「苟も男子たるものが、事業を天下に成さむと思つたら、世界の大勢に目を着けて歌羅巴や、亜米利加の学問を十分に究めて、我と彼との長所のみを採って大きな人物と成らなければ可けない、ただ在来の漢学一点張りでは、逆も此後の世の中に立って、世界的の人間とはなれない」（水川隠士「現代実業家立身伝」磯部甲陽堂、一九二二年、六二～六三頁）と、勝に説かれたことに感銘を受けた安川は、晩学ながらも上京し進学することを決意したのである。

兄たちの協力もあり、一八七一年に上京を果たすも、

数カ月後に長兄徳永織人が福岡藩贖札事件の責で刑死、一度帰福を余儀なくされ、順風な学生生活とはいえない生活を送った。再度上京し一八七二年に慶應義塾に進学。その際、次兄松本潜と三兄幾島徳は炭鉱経営に着手し、金銭的にも安川を援助した。しかしながら一八七四年、幾島が佐賀の乱で戦死すると、ついに東京での生活を続けることが困難となり、安川は志半ばで福岡へ戻り、炭鉱業に従事する事となった。

帰郷後、松本潜と二人で炭鉱業に着手した安川は、鞍手郡にある小炭鉱・東谷坑の経営にあたった。一八七七年に遠賀郡芦屋町に安川商店を開店、一八八一年には相田炭鉱を拡大、一八八七年に明治炭鉱の経営を開始し着々と事業を拡大した。一八八九年には平岡浩太郎と共同で赤池炭鉱の開発に着手。後述するが、平岡は旧福岡藩士であり、安川とは旧知の仲である鉱業家であった。一八九六年、共同出資の形で、明治炭鉱株式会社を設立、納屋制度の廃止をはじめとする経営改善を推進し、成功をおさめた。一九〇七年には、ガス爆発事故によって、死者三六五人と明治期最大の被害を出した豊国炭鉱を平岡遺族から引き受け、経営にあたった。これは事業拡大というよりも、平岡家の抱える債務処理としての性格が強いものであったが、結果的には明治・赤池・豊国の三

坑が安川・松本家の炭鉱経営の主力になった。

日露戦による好景気の影響をうけて、安川・松本家は一九〇八年、明治鉱業株式会社を設立した。同時期に、炭鉱経営の利潤と九州鉄道国有化に伴う株式売却の利益を元手に多角的経営を開始し、明治紡績、大阪織物、九州製鋼、黒崎窯業など工業を中心に事業展開を行った。また自身の事業とは別に、筑豊石炭鉱業組合や若松・門司の石炭商組合の組合長を歴任し、出炭統制や八幡製鉄所誘致などにも貢献した。このような、利潤追求だけではなく国家貢献を念頭に置いた経営方針や、教育をはじめ多方面で貢献したことが評価され、安川は「東の渋沢、西の安川」（松下伝吉『九州財閥の新研究』中外産業調査会、一九三八年、九〇―一頁）と評されることもある。一九一八（大正七）年に古希を迎えたことを機に、明治鉱業社長を健次郎に譲り、財界を引退。興味関心を政治方面や後述する日中合弁事業へと移行した。一九〇七年に設立した明治専門学校（のちの九州工業大学）寄付をはじめとする社会貢献が認められ、一九二〇年に男爵の爵位を授かり、衆議院議員・貴族院議員としても活動した。一九三四（昭和九）年一月三〇日、八六歳で死去した。

松本健次郎

松本健次郎は、一八七〇（明治三）年に安川の次男として誕生した。一八八七年に県立福岡中学校を卒業してすぐ安川商店神戸支店に勤務した後は、一八八八年に上京し国民英学校と東京物理学校へ入学、一八八九年には一年志願兵として熊本歩兵第一三連隊に入営するなど、各地を転々としていた。安川家の家督は長男澄之助が継ぐ予定であったため（澄之助は一八八四年に死去、三男清三郎が家督を継いだ）、跡取りを亡くした松本潜の養子として、一八九〇年に松本家の家督を相続した。一八九一年に渡米、ペンシルベニア大学に留学し財政経済学を学ぶも、実家の経営難により一八九三年に帰国。以後、健次郎は安川とともに安川・松本家の経営に参画することとなった。帰国後すぐに、留学経験を活かして神戸在住の外国人商人と商売を行うなど、事業運営における才覚をみせ、安川は炭鉱経営を担い、健次郎は販売を担うといった事業の分担により、安川・松本家を発展させた。また、筑豊石炭工業組合総長に就任しリーダーシップを発揮したほか、一九三三（昭和八）年炭鉱業連合会会長、一九四〇年に日本石炭株式会社社長、一九四一年には石炭統制会会長に就任し、石炭鉱業界を牽引する存在であった。戦中は、東条内閣において内閣顧問を担い、

大政翼賛会総務や軍需省顧問に就任するなど、要職を歴任した。戦後、日本経済連盟会会長に就任するも、戦中の活動により一九四六年に公職追放指定を受けた。一九五一年に追放指定が解除され、復帰後は中央政財界で活躍した。一九五八年に八七歳で引退、一九六三年、九三歳で死去した。

安川第五郎

安川第五郎（以下、第五郎）は一八八六（明治一九）年、安川の五男として誕生した。一八七七年に安川家の家督を継いだ三男・清三郎が誕生しており、第五郎は比較的自由な立場として養育された。

福岡県立中学修猷館へ進学し、一九〇六年に第一八回卒業生として卒業、第一高等学校へと進んだ。修猷館では緒方竹虎が同期であり、中野正剛が一期上に在学していた。第五郎の回顧録である『回顧六十年』には緒方竹虎が寄稿しており、両者の関係の深さがうかがえる。第五郎は第一高等学校卒業後、東京帝国大学工科大学電気工学科へ入学した。電気工学科を選択したのは、これからの時代では電気事業の発展が大きく関わるだろうと考えたからであった。一九一二年、帝大卒業後に日立製作所に就職し、電機機械製造を学んだ。しかし翌年、留学

の目的で日立製作所を退職、渡米しウエスティングハウス社に職工として勤務するなど経験を積んだ。帰国後、一九一五（大正四）年に電機製作所の設立を安川に掛け合い、安川電機製作所が誕生することとなった。社長は兄清三郎、第五郎は常務取締役となり経営にあたったが、開業からしばらく赤字続きであり、経営に行き詰ることもあった。しかし製造をモーターに絞って以降、徐々に業績を伸ばし、現在でも産業用ロボットなどにおいて先進的技術をもつ有力企業として経営を続けている。

第五郎自身は一九四二（昭和一七）年に電気機械統制会長、一九四六年に石炭庁長官（公職追放により辞職）に就任したほか、日銀政策委員、日本原子力研究所理事長、東京オリピック組織委員長と幅広く活動し、一九七〇年に勲一等旭日大綬章を受章した。一九七九年、九〇歳で死去した。

二 安川敬一郎と福岡人脈

安川がもつ人脈は、政財界の多方面にわたっており、そのすべてを網羅し分析することは難しい。中村による先行研究では、安川の人脈を①旧福岡藩出身の商人・企業家・政治家・官僚、②筑豊地域の炭鉱業者や鉄道関係

者、③阪神地域の商人・資本家、④東京の財閥系資本家や中央官僚・政治家の四つに分類している。これは安川の事業展開における人脈という点から分類したものである。今回はそれらの人脈の中でも、特に国士館との関わりという点から、福岡という地域的な面に則して検討したい。

安川および安川・松本家に多大な影響を与えたのが、玄洋社や修猷館を中心とする福岡県出身者ネットワークである。具体的には平岡浩太郎、頭山満、中野正剛、緒方竹虎、野田卯太郎、金子堅太郎、広田弘毅、山座円次郎、栗野慎一郎、鶴原定吉などの人名をあげることができ。上記の人物の多くは、国士館の支援者でもあり、維持委員や寄付者として国士館に貢献した。これらの人物の中でも、特に安川は平岡・頭山とは長年の親交があり、彼らを通して福岡県出身者の人脈を広げ、自身の事業につなげるとともに、要請を受けた場合は多大な金銭的援助を行っている。以下、雑記になるが、安川周辺の福岡県人脈を紹介する。

平岡は玄洋社初代社長であり、政治家である。安川とは赤池炭鉱の共同経営を行う事業提携者であり、「余の故人に於ける関係は尋常一様のものならず。実に刎頭の交も當ならざるものあり」（前掲『撫松余韻』七七九頁）

と表現する盟友の関係であった。また安川は平岡個人および玄洋社の政治活動の理解者であり、積極的な支援を行っていた。平岡の死後、平岡家所有の豊国炭鉱は一九〇七（明治四〇）年、明治期最悪の炭鉱事故を起こし、多額の負債を抱え、事後処理は困難を極めた。安川は、債権者であった三井財閥と協議し、平岡遺族の処遇も含め処理に奮闘するが、結局豊国炭鉱を一手に引き受け、平岡遺族に対して援助を行っている。第五郎は平岡と安川との関係に対し、安川が志半ばで慶應義塾をやめ政治家を目指す道をあきらめざるを得なかったことが、平岡の政治活動への支援につながったのではないかと回想している（安川第五郎述、河野幸之助・若林利代編『回顧六十年』万朝報社出版部、一九五二年、一三〇〜一三二頁）。

頭山満の詳細に関しては、岩間浩による評伝が『国士館史研究年報 楓原』第三号、第四号にわたって掲載されているため、そちらを参照されたい。頭山と安川の関係は玄洋社や孫文支援の活動が知られているが、いつ頃知り合ったのかは不明である。事業家と「浪人」として立場は異なっていたものの、頭山は安川を士魂商才の優れた見本として評価し、安川も頭山の思想・活動に共感し資金援助を行っていた（頭山満翁正伝編纂委員会編、

西尾陽太郎解説『頭山満翁正伝（未定稿）』葦書房、一九八一年）。また、頭山を介した人脈にも注目したい。中野正剛は安川から選挙や留学費用の支援を受けたほか、東方会の経営後援を含め、並々ならぬ援助を受けた。一九一七（大正六）年、一九二〇年の衆議院選挙において、中野が松永安左工門と争った際は、選挙調整も含め多大な支援を行っている。中野は対中開発意見など、安川が私見を新聞などに投稿する際は、安川のライターとしても活動していた。

緒方竹虎も安川から「安心して日本を任せられる男」と気に入れ（『修猷山脈』西日本新聞、一九七一年、六七頁）、留学費用の援助を受けたほか、中野と同様に安川の論稿などを代筆するなど支援関係にあった。中野・緒方は時に安川の頭脳となつて安川を支えたが、彼らを安川に紹介したのは頭山であった。第五郎は修猷館時代から二人と面識があり、中野は東条打倒計画のうち、後継として考えていた宇垣内閣の商工大臣に任命すべく、候補者である梶井剛の適応性を第五郎に尋ねるなど、篤い信頼関係があった（猪俣敬太郎『中野正剛の生涯』黎明書房、一九六四年、六〇三頁）。しかし、第五郎が証言するには、父を二人に紹介したのは頭山であり、そこから支援関係が生まれたという（前掲『回顧六十年』、

一三六―一三七頁）。

頭山とならんで、国士館最大の支援者のひとりである野田卯太郎と安川は、政界を中心とするつながりがあった。野田ならびに野田と国士館の関係については、熊本好宏「野田卯太郎（大塊）」（『国士館史研究年報 楓原』第二号、二〇一一年）に紹介されている。野田は通信大臣・商工大臣を歴任した立憲政友会の幹部だが、若松水道計画や衆院選を通して安川とつながった。安川と野田の関係については、安川に原敬など中央政界有力者を紹介するなど、安川の政治活動に関して野田の果たした役割は大きいとの評価もある（季武嘉也「貴族院議員・安川敬一郎―「実家」の普選法反対活動―」前掲『近代日本の企業家と政治―安川敬一郎とその時代―』。野田の三男・秀助には安川清三郎の長女・美和子が嫁いでおり、彼らの結婚式には野田の長男俊作夫妻や娘婿である松野鶴平夫妻・加藤虎之助（御木本幹部）夫妻が出席し、頭山満・徳富猪一郎・有賀長文など国士館支援者でもある各界著名人が来賓として招かれた。野田が病床に伏した折には俊作が安川のもとを度々訪れ、病状の説明を行うなど野田家と安川・松本家の関係は、血縁関係もあり、確固たるものであったといえる。

その他、安川と関わりの深かった福岡県出身者を簡単

に紹介する。金子堅太郎は安川の四歳下ながらも、同村の出身であり、修猷館で学ぶなど共通項があった。二人は藩費留学時代よりの知友であり、その関係は安川が亡くなるまで続いた。八幡製鉄所誘致の際、金子は農商務次官で製鉄所候補地選定責任者であり、安川が金子に直接説得を試みたことが誘致成功に大きく貢献した。また明治専門学校設立時の土地獲得では金子の弟（辰三郎）を通じて取引を行っている。また、広田弘毅は、修猷館出身の外交官山座円次郎の紹介で、松本健次郎から大学費用など金銭的支援を受けていた。

前述したように、安川・松本家は、福岡県出身者のネットワークに属しており、安川・松本家が行った政治活動・進学に対する支援の多くはそこでの人脈を介して行われた。また、安川の長年の知己である平岡・頭山は、安川の人脈形成における中心的人物でもあった。安川・松本家は福岡県出身者のネットワークの中で、金銭的支援者として役割を担うだけでなく、ネットワークを自身の活動で利用することもあった。

三 安川・松本家と国士館

次に、安川および安川・松本家と国士館との関わりを



1955年5月 国士館再建感謝報告会（国士館史資料室所蔵）
左手前より1人目が安川第五郎、右手前より3人目が松本健次郎

考察する。国士館との関わりにおいて確認できる最初の記録は、「麻生大吉宛柴田徳次郎書簡」（一九一八年四月二五日付）であり、頭山を通して安川に対し、おそらく金銭融通願いがなされている。国士館が世田谷に移転す

る際には、筑豊鉱業家各位に対し金銭的援助を打診しており、安川・松本家もその対象であったと推測される。「大正八年森俊蔵懐中日記」によれば、一九一九（大正八）年七月五日に森俊蔵が戸畑の安川清三郎を訪ねており、ここでも援助願いがなされたと考えられる。麻生太吉宛柴田徳次郎書簡（一九二〇年七月二六日付）でも、再度鉱業家に寄付勧誘を願い出ており、ここには松本健次郎の名が記されている。

しかし、安川・松本家が、国士館に直接金銭的援助を行ったという記録は少ない。安川日記によれば、森から寄付願いがなされたであろう一九一九年七月、安川自身は三日から一〇日にかけて東京に滞在し、野田や渋沢などと度々会談している。その後大阪に立ち寄ったのち、一五日に福岡へ戻るが、その後も日記には国士館に関する記述はない。一九一九年度予算における賛助者名簿や同年の寄付額確定者一覧にも、安川・松本家に属する人名は見あたらない。同時期国士館に対し多大なる援助を行った麻生家と比較すると、安川・松本家の事業規模の割には、国士館に対する援助が少額であったといえる。「国士館完成長老懇談会経過（議事録）」（一九二六年六月三日）では、頭山満に安川への寄付願いをまとめるよう依頼しているが、同日の「国士館関係諸先生の御批評」

において、健次郎は「今にうんと、まとまつて加勢するよ」との言を寄せており、国士館に対する支援の不十分さを自覚しているともとれる。

後述するが、安川は国士館の教育理念にも通じる教育観をもっており、また教育事業への興味関心は非常に高かった。それにも関わらず、国士館への支援が不十分であったのは、国士館に対して理解を示さなかったのではなく、当該期に安川・松本家が置かれた経済状況が大きく影響した結果だと推測される。国士館が創設された一九一七年、さらに世田谷に移転した一九一九年、安川・松本家は深刻な資金難に陥っていた。安川は古希を機に財界の一線から退く前後より、自身の念願であった「国家的事業」として日中合弁事業に重点を置くようになる。一九一七年、安川は漢冶萍公司与契約を結び、合弁事業として九州製鋼を設立した。これは井上準之助らと協議し、安川にとつては国家に貢献する一大事業として行われたものであった。しかし、銑鉄の流通数などに問題を抱え、晩年安川自身も振り返るように、失敗に終わった。これにより安川・松本家は、すぐに炭鉱業をはじめとする事業へ影響は出なかったものの、多額の資産を失った。また、安川が設立した明治専門学校も、一九一八年頃からの物価高騰のあおりを受けて経営難に陥っていた。

明治専門学校は設立時の寄付による基金をもとに運営されてきたが、緊急の処置として何度か特別融資を行い、運営費を賄うこととなった。しかし結局私立として学校を維持することが難しくなり、一九二〇年に明治専門学校を国に寄付し、官立に移行させた。

頭山満・野田卯太郎・麻生大吉らを通して、安川・松本家へも国士館支援の依頼は度々行われていたことは間違いないが、麻生らと比較してその支援が少ないものであった背景には、このような経済的状況が影響したと考えられる。しかし、こういった状況の中でも、安川および安川・松本家は国士館維持委員会の委員として、国士館に対して支援を行っている。

戦後、安川・松本家の国士館への支援は厚くなった。健次郎は国士館再建趣意書に名を連ね、国士館維持委員会や大学創設資金へ寄付するなど、様々な面で国士館復興に協力している。健次郎死去の際『国士館大学新聞』（一九六三年一〇月一七日）に掲載された追悼文では、健次郎は体育学部の創設やプールの建築において、率先して国士館を支援した恩人と評価されている。そのほか国士館大学維持委員会名簿や一九五三（昭和二八）年の開学感謝会出席名簿には、明治鉱業を継いだ息子である松本幹一郎の名も確認でき、国士館支援を息子に引き継いだこ

とがわかる。また、健次郎の三男・馨は、西洋政治史の研究者であり、国士館では、政治学研究科・経済学研究科の設置の際より、非常勤講師として勤務し、大学院黎明期を支えた。第五郎も大学創設資金に寄付したほか、一九五五年の再建感謝報告会に参加しており、安川・松本家が戦後の国士館復興に尽力している様子がうかがえる。特に工学部創設に関して、第五郎は支援に力が入ったようである。技術者育成に関する講演なども行っている。安川・松本家は、自身の経済状況にに応じてではあるが、国士館創設期から戦後に至るまで、親子・兄弟にわたって国士館を支援した。

安川・松本家が国士館と関わり、支援を行った理由としては、前述した国士館支援者人脈のひとつである福岡県出身者のネットワークに安川・松本家も組み込まれていたことが大きな理由である。国士館最大の支援者のひとりである頭山と安川は長年の信頼関係にあったほか、頭山以外の人脈、具体的には、麻生や野田を通じて安川・松本家と国士館ないし柴田徳次郎はつながっており、彼らが国士館支援に至るのは自然な流れであったと推測できる。しかし安川は紹介があったとしても自身の意にそぐわないものであれば支援を断ることもあり、人脈だけが国士館支援の理由とはするのはいささか疑問が残る。

国士館支援の理由のひとつとして、安川自身も国に貢献するという「国士」的考えをもっていたことが考えられる。最後にこの点について考察したい。

安川・松本家は炭鉱業に限らず、紡績・鉄鋼・窯業など多角的経営を行ったことが地方財閥として評価される要因である。安川・松本家の事業展開で際立った特徴のひとつが、多角化する事業分野を工業に絞ったという点である。この多角化および経営方針は安川の「天恵論」によるものであった。以下、少々長くなるが「天恵論」に関し、安川の言葉を用いる。

明治二七年の日清戦役は遽に石炭の需要を増進する気運を促し、戦禍は却って我をして再生の恩沢に浴せしめたり。斯くて三一・二年の比より秩序稍や整ひ、更に日露戦役後の需要激増に遭遇するや、是に始めて余は事業に対し確乎不拔の自信を懐くを得るに至れり。然れば我鉱業の光明は日清日露両戦役が齊したる賜にして、国家に対して感謝せざるべからざるものとす。最初家政を維持し子弟を養育するの資に充てむが為の窮策に過ぎざりし我事業が予期以上に發展して、小なりと雖も今日実業界の伍班に列するの境遇に達し得たるは、是れ正しく偶然の天恵

不慮の僥倖と謂ふべきなり。余は此天恵を私して子孫を怠慢に導くを欲せず。故に聊か従来の事業に対する資金の過剰を見るや、明治専門学校を創立して天恵に酬ゆるの微衷を尽し〔後略〕(前掲『撫松余韻』七七七〜七七八頁)

日清日露戦により莫大な利益を得た安川は、自分の事業の成功は「偶然此に至りしものなり」として、得た富はあくまで「天恵」であり、「僥倖」であるため、私腹を肥やすのではなく、国に還元せねばならないと考えていた。

そのため、国の発展に寄与する事業を中心に手広く事業を展開することを目指した。銀行業などではなく、産業で国に貢献できることが重要だと考え、明治紡績や安川電機製作所、九州製鋼や黒崎窯業などの会社を展開した。経済や資本主義に対しては、「資本家の資本は社会の供託物」という論をもっていた。企業家・資本家は社会共存のために産業・生産組織の運用を担うという役割をもっており、その資本は企業家の私欲を満たすために運用するのではなく、社会(国家)のためになされるべきであると考えていたのである。安川の政治活動や教育に対する多額の支援は、こうした思想に基づいてのこと

であった。また、こうした安川の行動理念は息子たちにも受け継がれ、安川・松本家の経営が行われた。

特に教育に関して、安川の国家に貢献するという理念を体現したのが、当時急務とされた技術者の養育を目指して一九〇七年に設立された明治専門学校である。明治専門学校は、德育重視の教育方針を掲げ、師弟関係の充実を意図した寄宿制度や精神涵養を目的とする道徳重視のカリキュラムを設置した。これは、安川が知識面だけではなく道義的にも優れた、国家に貢献する人材を輩出すべきという考えをもっていたからであった。また、明治専門学校は教職員・生徒が学校敷地内に居住するだけではなく、医療所や郵便局、教職員の子供を中心とした小学校を設け、「町」として運営されていた。世田谷移転後、「国土村」として共同生活を送っていた国土館教育と通ずるものがある。このように、安川の教育観は、国家社会に貢献する「国土」の養成を目指した柴田徳次郎や国土館の教育理念と共鳴する点があり、国土館支援につながったと考えられる。

おわりに

本稿で述べたとおり、安川は国に貢献するという強い

意志のもと、幅広い人脈を用いて、重工業を中心に多角的経営を行った人物であった。安川の理念は息子である健次郎・第五郎にも影響し、彼らはその資産を国家貢献のために使用することを理想として、政治・教育をはじめとする様々な事業に支援を行った。国土館支援はそのひとつである。安川・松本家の国土館支援の背景には、福岡県出身者のネットワークと、安川のもつ「国土」的思想があったと推測できる。教育家である柴田徳次郎と実業家である安川敬一郎では立場は異なるが、国家社会に貢献するという点において共通する部分があった。国土館開校時や世田谷移転の頃、安川は日中合弁事業と明治専門学校の官立移管という二つの問題に悩まされており、国土館へ多額の金銭的援助を行うことは困難であった。しかし、国土館とのつながりは途切れることなく、息子である健次郎・第五郎によって戦後も支援が行われた。彼らの思いは現在も、国土館の教育の中に息づいている。